

# 方法としての企業家研究

——オーラル・ヒストリーの技法が可能とする分析課題——

砂 川 和 範

## 目 次

はじめに

- I. 企業家研究という実践——「フィールド」としての個人
- II. マージナリティ仮説の系譜——逸脱と革新の経営学
- III. 企業者の「語り」を読み解く技法のために
- IV. 課題と展望

## はじめに

本稿の目的は、オーラル・ヒストリー（口述史）の手法をめぐる議論を探索し、それを経営史学、あるいは経営学の領域に応用した場合の可能性を見積もることにある。とくにその方法を応用する妥当性があるのが企業家活動（entrepreneurship）研究の系譜が追究してきた分析課題においてであることを示す。それはいいかえれば企業家個人の分析を通じた広義の経営学研究を試みることの重要性を主張することである。その前提において本稿は調査を進めるにあたって、企業家のライフ・ヒストリー（生活史）の「語り」を読み解くうえでの留意点とフレームワークについて考察することを主眼とする<sup>1)</sup>。

---

1) 筆者は、故関口定一教授とともに、中央大学企業研究所の共同プロジェクト「経営史的アプローチによるオーラルヒストリー」のメンバーであった。

企業家という個人に着目した経営学研究においては<sup>2)</sup>、企業家を〈対象〉として研究することにとどまらず、企業家を通じて、いわば〈方法〉として組織現象を研究する方略を構想しうる。いいかえれば経営戦略や組織、イノベーションといった諸テーマと関連づけて、彼の主観的な状況認識と意思決定のプロセスとメカニズムの変動のプロセスのリアリティを解明す

---

このプロジェクトでは、ひとつの課題として、社史などの形ではなかなか記録の残りにくい（中小）企業家を対象としたオーラル・ヒストリーを組み込んだケース研究の蓄積を構想している。

本稿は、そのため効果的な調査を進めるうえでの方法論的な論点を整理するための考察である。その前提となる状況認識は以下のようなものである。

一般に、企業研究においてはヒアリングという手法が多用されるが、そこで収集されるデータの本質や利用方法について厳密な議論はあまりなされてこなかった。例えば昨今では、本来は長期の参与観察を意味する「フィールドワーク」という人類学ルーツの概念なども（多分に誤用的に）使用されている状況にある。また歴史研究者からも口述記録は（文書資料に基づかない以上）歴史ではないという評価も存在する。

もちろん歴史的手法と認められなくとも、これまでの手法では光をあてることができなかつた経営学上の課題を分析するのに資する方法なのであれば、その導入意義は大きいというのが本稿の立場である。

- 2) 「経営者企業」「組織能力」を軸に現代資本主義のダイナミズムをとらえようとしたチャンドラーも、経営者組織の重要性を認めながら、叙述では経営者組織の営みそのものよりも、それを構成している少数の個人企業家に大きなウェイトをさいているのである。これらの意味で、チャンドラー理論も「企業者史学」の系譜と無縁ではない。

また経済発展あるいは企業成長の初期局面ではやはりシュンペーターの個人企業家の活躍の場が大きいのであり、それが後の段階になると、チャンドラー的経営者組織の役割が大きくなるのである。さらに、アメリカのシリコン・バレーに代表される今日のベンチャー・ビジネスは明らかに、シュンペーター的個人企業家たちによって生み出されている。企業者活動の歴史をみる場合、個人としての企業家、組織としての企業家双方に光があてられなければならない。Chandler, A. D., Jr. (1962) (有賀訳 (2004)); Chandler, A. D., Jr. (1977) (鳥羽・小林訳 (1979)); Chandler, A. D., Jr. (1990) (安部他訳 (1993))。

るのである。そういった前提においては、問題と選択肢と結果、という決定プロセスだけではなく、彼が抱える主観的な意図や葛藤、環境や状況の変化、それに対応した意思決定プロセスの変化、あるいは決定プロセスをめぐる能力構築や進化なども含め、研究することを意味する<sup>3)</sup>。誤解のないように補足すれば、これは従来のマイクロ組織論が前提とする主流派心理学的な仮定、つまり個人の実体化を前提とした議論には組しないことも意味する。本稿では個人のアイデンティティや意思決定プロセスは社会的・状況的に構成されながら変化していくものであるととらえる<sup>4)</sup>。

つぎにオーラル・ヒストリーという技法とライフ・ヒストリーという手法について、歴史的アプローチとの関係について確認する。

一般に経営史学という領域では、歴史を「対象」として研究するのみならず、「過去からみた現状分析」として「歴史的方法によって」企業経営を研究する（いわば経営現象をめぐる歴史社会学）ことを課題としてきた側面がある。さらに経営史学を企業主体の機能に焦点をあてた史的分析和定義すれば、それと一般的な経営学には分析課題上、それほど相違はない。ただ分析の手法は大きく異なる。前者は、法則定立的（nomothetic）であり、後者は個性記述的（idiographic）であり、具体的なケースに基づく因果関係のメカニズムについて論理的な説明をする。このことは、「事実を時系列に沿ってただ起こったように記述する」ことでは必ずしもないし、もちろん事例を単に一般的な理論へと回収してしまうような作業にとどま

---

3) Elster, J. (1985).

4) 心理学においても認知科学への転換のなかで状況論アプローチが生まれている。このことについてはすでに2本の論考で検討した。砂川（2001）62-83頁；（2003）91-143頁。

状況的認知論の嚆矢的研究としては、Hutchins, E. (1990)（宮田訳（1992））；Lave, J. and Wenger, E. (1991)（佐伯訳（1993））；Lave, J. (1988)（無藤他訳（1995））；Wenger, E. (1998)。

るのであれば、そこに方法論的な独自性を主張するような根拠もみいだすことはできないであろう。しかし、後述するように、いくつかの先行研究を前提として考えたときに、これは、正統的な系譜を持つ社会分析のひとつの手法となることを示す<sup>5)</sup>。

C.W. ミルズによれば「社会のいかなる研究も、生活史の諸問題と歴史の諸問題、さらに社会における両者の相互滲透の問題にまで立ち到らないならば、その探究の道程を完了したとはいえない」<sup>6)</sup>。社会との関係のなかにおきなおすことは「個人」史を理解するうえで不可欠の操作であるとともに、逆に「個人」のこのす軌跡を辿ることこそは「社会」を洞察するうえで欠くべからざる基礎となる。この相互反照を欠く社会研究は、必然的に、底の浅いものに留まらざるをえないのである。

なお本稿の構成は、まずⅠ.において企業家研究の系譜を確認し、そこでのアポリアを抽出する。つづくⅡ.では、企業家研究のアポリアを典型的に考えることができる、逸脱と革新に焦点をあて、それを説明する有力な仮説であるマージナリティ仮説の系譜について検討する。そしてⅢ.においてⅠ、Ⅱで検討してきた課題について、オーラル・ヒストリーの手法を導入することの妥当性と可能性について考察する。その際に、企業者の「語り」を読み解くうえでの分析上の課題についても検討する。

## Ⅰ. 企業家研究という実践——「フィールド」としての個人

### (1) 企業家研究のアポリア

まず、経済学・経営学のなかにおける企業家論の位置づけの変遷につい

---

5) 沼上は、両者について「カヴァー法則モデル」と「メカニズム分析モデル」という区別を行っている。この意味では、沼上の立場は、経営史学の伝統とそれほど異なるわけではない。沼上(2000)。

6) Mills, C. W. (1959) (鈴木訳(1995))。

て確認しておきたい。周知のように、経済学において「企業家」という概念に重要な役割を与えたパイオニアは、R. カンティヨンである<sup>7)</sup>。「企業家」の原語としてアントルプルヌール (entrepreneur) というフランス語が使われているのはこの理由によるとされる。

経済学では通常、土地（自然資源）・労働・資本の3つを本源的生産要素と呼んでいる。土地、労働、資本の増減によって生産も増減する。しかし、現実にはこの3つの生産要素を使って、どのような方法で、どのような労働力の配置で何を作るのか、そのことについて誰がそれを意思決定するか、つまり3生産要素を結合させる主体の役割が不可欠であるという認識である。こうした主体のことをカンティヨンは「企業家」と呼び、先見の明を持ち、危険を進んで引き受け、利潤をうみ出すのに必要な行為をとるものとした。

また American Economic Association の第80回年次大会では、「企業家」をテーマとするセッションが設けられ、企業者史研究の A. H. コール、経済学者の W. J. ポーモル、経済発展論の H. ライベンシュタイン、経済史家の J. H. ソルトウらがディスカッションに参加したが、そのなかでポーモルの言葉を引用して宮本又郎はつぎのように述べている。

「企業家は、経済分析のテーマのなかで最も興味深いと同時に、最も扱いにくいものである。企業家は企業の意思決定ハイアラーキーの頂点に位置し、それゆえ、自由企業社会が活力をもつか否かに対して重大な責任を負っている主体と考えられてきた。企業家はその形態や機能について明確な定義づけを与えられていないほんやりとした存在ではあったけれども、経済学の古典においてはしばしば登場してき

---

7) R. カンティヨン (1943) 戸田訳。

た。(中略)ところが、近年では、その役割の重要性がいよいよ明白なものとして認められるようになったにもかかわらず、企業家は経済理論の文献から事実上姿を消してしまった。」<sup>8)</sup>

登壇者のひとりであったライベンシュタインは、「標準的な競争理論においては、企業者職能は必要とされていないように思われる。もしすべてのインプットとアウトプットが市場で取引され、それらの価格が既知であり、かつインプットとアウトプットとを一意的に関係づける一定の生産関数があれば、あるインプットからアウトプットを生み出すことによる利潤はつねに予測することができる。正の純利潤があれば、それはこの市場への新参入のシグナルとなる。資源の動員問題や、それをアウトプットに変える問題は些末な問題となってしまう。この立場では、企業者職能の欠如など生じるはずはないのである。しかし、実際にはしばしば企業者職能の欠如が起る。標準的な競争理論では、企業家のバイタルな役割が隠蔽されてしまっているからだ」と書いている<sup>9)</sup>。

以上確認してきたように、本来、経済学のなかに位置づけられていた企業家研究は、その後、経済学の標準化の流れのなかで傍流に位置づけられるようになった<sup>10)</sup>。とはいえ、いくつかの学派に分かれ、長い歴史を持つ企業家研究は<sup>11)</sup>、とりわけ1940年代にJ. シュンペーターの『経済発展の理論』によって理論的に整備されたことは、あらためて復唱する必要もない

---

8) 宮本 (2004) 96-106頁; Baumol, W.J. (1968).

9) Leibenstein, H. (1968).

10) 例えば、マーシャル (A. Marshall) の時代では経済学においては企業家は重要な位置を占めている。Marshall, A. (1890).

11) Menger, C. (1871) (安井・八木訳(1999)); Knight, F.H. (1921) (奥隅(1959)).

ことかもしれない<sup>12)</sup>。その後、企業家研究は、経済学の主流に返り咲くことはないものの、それを理論的源泉とした多くの主流派理論に対抗的な諸研究を生み出すだけでなく、イノベーション管理を中心とした経営学や歴史研究、経済社会学など周辺の諸領域へ大きな影響を与えたのは周知のとおりである<sup>13)</sup>。本稿では、理論的研究を継承した学派の流れはおくとして、実証分析的な方向での継承者たちについて取り上げ、その分析視角と手法について検討しておきたい。

1948年に、シュンペーター自身も当初参画して、ハーヴァード大学に、共同研究機関として「企業者史研究センター」(Research Center of Entrepreneurial History)が設立された。企業者史研究センターが設立されてまもなくシュンペーターは急死し、コール、T. C. コ克蘭、L. H. ジェンクスなどの学者がそれを継承していったが、その結果、確立されることになった「企業者史学」(entrepreneurial history)はシュンペーター理論を軸としながらも、それを拡張するものとなった。

ここに結集したコールらのメンバーによって展開されたのが、「企業者史学」であり、文字通りシュンペーターの直接の継承者たちである<sup>14)</sup>。センターの機関誌 *Exploration in Entrepreneurial History* (その後 *Exploration in Economic History* に名称変更)に掲載されている諸論文をみれば、経済学や社会学、歴史学などの幅広い学際的アプローチが文字通り探究される新しい領域形成の試みであったことが理解できる。企業者史研究は、経済学と経営学の枠内にとどまることなく、歴史学や社会学、行動科学、心理学

12) Shumpeter, J. (1926) (塩野谷・中山・東畑訳 (1977)).

13) Lachmann, L. M. (1986); Kirzner, I. M. (1966); (1976); Dolan, G. (2010); (2018); Braun, E. (2014a), pp. 97-102; (2014b), pp. 111-113.

14) A. H. コール (1965) 中川訳。

など、いろいろな学問分野が学際的に協力して遂行されなければならないと主張された。

しかしその方法的多様性と対象の幅広さをよそに、その目的としている課題はきわめてシンプルなものであった。その課題は、ひとことでいえば企業家活動を「人間的・主体的なものとの社会的・構造的なものとの接点」として捉え、そのプロセスに焦点をあてることであった。これは、1920年代にハーヴァード・ビジネススクールにおいてミネソタ大学より招聘されたN. グラスを主任教授として成立した「経営史学」(business history)のアプローチを批判し、経営史学が1940年代に突き当たっていたアプローチ上の限界を克服するべく登場したものなのである。

中川敬一郎によれば、経営史学は、経営政策、経営指揮、経営統制などの要素的経営機能に研究の焦点を集中するあまり、そのような作業を実際に遂行する具体的な人間主体を軽視する傾向がみられたという。また、中川は明示的に触れていないが、補足しておくとするれば経営史学の成立過程においては経営管理の論理が中心であり、革新を生み出す論理は前景化されていない。このために「企業経営というものが歴史的に一定不変のものでないことを明らかにし、企業と政府あるいは企業と従業員との関係や企業経営の倫理性などについて歴史的感覚を養成するという当初の期待にこたえられなくなってしまった」という問題が認識されていたのである<sup>15)</sup>。

この「社会的・構造的なものとの接点」に焦点をあてるという当初の目標は、昨今、企業家精神をとりまく出版物一般において、きわめて個人的

---

15) 中川 (1963) 153頁；中川 (1981) 117-122頁。中川は文化構造あるいは文化的諸要因を分析する視座として、つぎの4つのカテゴリーを挙げた。(1) 目的あるいは目標の体系 (goal, objective)。(2) 価値体系 (value system)。(3) 社会的格付け (social ranking)。(4) 行動の形式 (pattern of conduct)。鳥羽 (1970) 21頁。

な特徴——企業家的パーソナリティやカリスマなど——とにかく回収するような言説が横行する現在であるからこそ、その重要性を再認識し強調しておくべき課題である。ただ、留意点もある。この課題について、当初は、この社会的・構造的なものとのかかわりが非常に単純にとらえられたために、この企業家史学のアプローチもそれほど長い命脈を保つことができなかった、という周知の事実である<sup>16)</sup>。

なぜならば、まず社会的な要因とのかかわりは、特定の社会に固有な価値体系などの文化的諸要因から、その社会における企業家の活動を規定し、特徴づけるという説明図式に収斂する傾向を強くもったために、本来の課題であった創造的で革新的な企業者による体系破壊の側面に光を当てることを捨象しがちな傾向をもったのである。

また構造的な問題とのかかわりについては、シュンペーターを系譜とすることもあり、「経済史学と経営史学の境界領域」<sup>17)</sup>というかたちでとらえられたために、あくまでも経済学、とりわけ経済発展とのかかわりだけを中心に議論がなされてしまう傾向があった。このために、あくまでも個人が企業家的な機能との関連で論じられる傾向にあった。すなわち具体的なあるひとりの人間が、企業者であるかどうかは、彼が、いわゆる新結合の遂行という機能を果たしているかどうか、すなわち革新者 (innovator) であるかどうかというその1点にかかっているという図式でとらえられた。すなわち企業家というものは、通常日常的な言葉でとらえられているような職業なのではなく、「だれでも『新結合を遂行する』場合のみ基本的に企業者であって、したがって彼が一度創造された企業を単に循環的

---

16) その後、パーソンズの構造機能主義社会学を吸収したチャンドラーによる構造論によって経営史学は一般経営史の統合理論として形成されていくのは周知のとおりである。

17) 米川 (1973) 3頁。

に経営していくようになると、企業者としての性格を喪失し経営管理者となるとする<sup>18)</sup>。

このように機能として企業家機能を考察することは可能であるが、ここでは再び、個人としての企業家の位置は見失われてしまうことになる。

またシュンペーターの問題意識として、企業者は、革新者であると同時に均衡の「創造的破壊」を行う「逸脱者」であることを強調している点である。安定した環境（均衡状態）においては、各経済主体は自分の地盤を確信しており、また他のすべての経済主体との間に、環境に適合した態度についての役割期待の相補性が成立しているために、人間は、自分自身の知識と経験だけで、迅速かつ合理的に行動できるのに対して「彼がその起動を変更しようとするときには、潮流に逆らって泳ぐことになる」のであり、われわれが獲得したあらゆる認識や行為慣習は、われわれの人格の他の要素と不可分に結びつき、既存の潜在意識層に沈下しており、通常、遺伝や教育や環境の圧力によってほとんど摩擦なしに伝達されていく。

しかし、そういった慣行の領域の外に出て、伝統的な思考習慣や行為規範にとらわれることなく革新を遂行するためには、企業者は「洞察力」や「経営構想力」、あるいは「決断力」、「精神的自由」といったものをもつことが必要なだけでなく<sup>19)</sup>、必然的に逸脱者たらざるをえないとする。逸脱者というのは、既存軌道を打破する存在であり、その過程において、法律・政治的抵抗、社会集団の他の成員による直接的、間接的な非難、社会的な拒否、暴力的な抵抗などの「社会的反作用」(social reaction) に直面し、葛藤しなければならない試練を抱えることをシュンペーターは指摘している<sup>20)</sup>。

---

18) Shumpeter, J. (1926) (塩野谷他訳 (1977) 207頁)。

19) 大河内 (1979)。

20) Shumpeter, J. (塩野谷他訳) 前掲書。例えばゲーム産業勃興期、日本のゲ

以上、企業家活動を社会的・構造的背景に回収するような説明図式も、経済過程の外部から革新をもたらす独立的な人間主体としての存在という認識にとどまっていることも、両者の立場に立つかぎり、認識の革新をもたらす分析はおこなわれず、思考停止、あるいは理論的な後退を余儀なくされる。状況に規定されながらも、そこから個人が逸脱するプロセスとして企業家活動をとらえ、そのメカニズムや役割を解明しようとするれば、経済理論や素朴な意味での社会学のみでは十分でないのである。だからといって企業家の素朴な意味での心理学的研究や、パーソナリティ研究に終始することも、企業家研究が当初持っていた高い志を継承するものとはいえない。

むしろ社会的な要因と密接に相互規定しながら変化していく個人のアイデンティティや変化していく意思決定プロセスのダイナミズム（つまり環境認識の変化と意思決定メカニズムの変容）を時系列に沿って追いかけてながら、そこで企業家機能が発揮される臨界点を分析することに妥当な方法が必要であると思われる。

企業家活動（企業家研究）の研究課題においては、組織は環境に適応すべきという規範を括弧に入れることを意味する。これは、制約、脅威、機会を再考する、ということであり、ときには逆境をバネとする成長、あるいは逆境を逆手にとった成長という現象もありうる<sup>21)</sup>。

---

ームメーカーは、深刻な社会的圧力に見舞われた。初期、コインゲームの時代は、ゲームセンターが「非行の温床」とされた。またテーブルゲームが主流であったために俯きながら遊ぶ人間の姿勢が「暗い」と攻撃された。その後、家庭用ゲームが普及してからは、子供の「内向性」の誘発、あるいはロール・プレイングゲームである「ドラクエ」が、それを真似た子供の殺人事件を引き起こしたとして新聞に糾弾された。その後の「体感ゲーム」の開発やテーマ・パークという形式の提案というものは、このような社会的圧力に対抗しゲーム産業のイメージ向上をめぐる各社の格闘とイノベーションの歴史なのである。詳細は、砂川（1999）。

(2) 方法論的個人主義——「フィールドとしての個人」からみた組織論  
「企業者史」はシュンペーター理論を継承としつつも、それを拡張するものであった。まず第一には、シュンペーターにおいて「革新者」と定義されていた「企業家」概念を拡張したことである。新しい事業が起こり、普及するにあたっては、通常、発明家があり、その発明を事業化する革新者が現れ、模倣者がそれに追従するというプロセスをたどることが多い。ここで、経済発展の原動力としてシュンペーターによって着目されたのは革新者であった。しかし、現実には最初の革新者は失敗することが少なくないし、模倣者あるいは二番手以降が成功し、これが実際には経済発展にとってより重要な意義をもつことも多い。あるいはイノベーションが導入されても、その後における小さな改善の積み重ねこそ重要な経済的意味をもつことがある。つまり、新しい事業を「創始する」ことだけではなく、それを「拡大し」「維持する」こともきわめて重要な企業者活動である。それゆえ、「革新者」だけでなく、「経営者」「管理者」もまた「企業家」のなかに含められなければならない。これがコールらの企業者概念となった。

これは企業家の非連続的（飛躍的）側面ばかりにではなく、連続的・漸進的側面の重要性に着目することである。経済学の言葉でいえば、発展は「均衡」から「不均衡」（創造的破壊）をつくりだすことのみによって生まれるのではなく、「不均衡」から「均衡」に向かうプロセス、すなわち「競争」によっても担われるということである。こうした考えはさきに引用したカーズナーをはじめ、経営学者たちのイノベーションマネジメントをめぐる議論に継承されている。革新をシュンペーター流の「根本的革新」（あるいは「構築的革新」と日常的な改良・改善である「漸進的革新」

（「通常の革新」）に分け、その両者に積極的な意味づけを与えようとする今日の支配的な見解となってきたのである<sup>22)</sup>。

### （3）人間の実体化に抗する——意思決定プロセスへの注目

かつて山下幸夫は、「イノベーション、さらにはそれを遂行する企業家が歴史上のある時点に出現、時には群生するのか、この逸脱現象の研究こそ経営史学の真の課題である」<sup>23)</sup>と主張した。

また一方で、米倉誠一郎は、「イノベーションが複雑化するにしたがって、企業家の対応も1対1というわけにはいかず、2人あるいはそれ以上のチームであることもおおくって」いるため「企業家のあり方さらにはその能力を示す企業家能力を企業家の資質や社会的背景から解き明かすことはますます難しくなっている」として、企業家を、企業家機能としてとらえ、イノベーションの類型化と対応させることを提唱している<sup>24)</sup>。

企業家史学の伝統においては、個々の事例分析をその主だった手法とする一方で、その事例は、多数の事例を基に、そこから一般法則化を志向するようなものではない。むしろ企業家活動においては、規則性、多数性との訣別不規則性、逸脱性の発見こそが、その方法的特徴となりうる。もちろん、そこで新たに発見された逸脱は、従来の規則性、法則性をたとえ逸脱するものであったとしても、そこからさらなるメタ次元の規則性を発見することができる場合もあろう。それは意思決定や戦略のパラダイムがシフトするようなものかもしれない。もしそうであるとするならば、パラダイムがシフトするような企業家活動は、それほど日常的に頻発する事象ではない。

---

22) 安部（1995）。

23) 山下（1968）。

24) 米倉（1998）。

しかし、単にそうするのであればその方法はイノベーション戦略論でいいはずなのである。もし企業家活動の研究というものがあるとするならば、それは「人」に着目した研究手法を堅持することが重要であると思われる<sup>25)</sup>。

しかも、それは企業家的な「精神」、[心の有り様]、[パーソナリティー]、あるいは革新の「遂行能力」として、素朴な意味での心理学的実体化を回避することが併せて必要と思われる。なぜならば、心理学的な実体化は、社会科学としての分析上の思考停止を意味するだけでなく、組織論的・システム論的な段階に発展してきた経営学（史）研究を、「主体主義」的に退行させることを意味するからである。

もし企業家研究が既存の経営学研究に貢献できる可能性があるとするならば、それは「企業家の意思決定プロセス」の分析の解像度を上げていくものでなければならず、また、その分析が経営管理における意思決定プロセスとは異なった事実、例えば決定的瞬間における非定型の判断力のようなもの、を明らかにするものである必要がある。

そのためには、個人からみた組織研究とでもいうべき方法が必要となる。それは、個人がさまざまな組織や社会集団に重層的に関わるなかで（いわば状況に埋め込まれた状態で）、必然的に抱える心理的な分裂や葛藤を、どのように認識し、調整し、主観的に判断し、行動し、学習したか、というプロセスを意思決定プロセスと考え、そこでの企業家的な特徴は何か、またそれを規定する要因は何か、という探究である。

---

25) ミンツバーグらは以下のように指摘している。Mintzberg, H. et als. (2008) (ヘンリー・ミンツバーグ、ブルース・アルストランド、ジョセフ・ランベル著 齋藤訳) (2012)。「戦略形成がたった1人のアントレプレナーの意識や行動、すなわちブラックボックスの中で形成される」(訳131頁)。「たった1人の個人の行動にすべてが包含され、そのプロセスがどんなものであるか理解できない」(訳153頁)。

本稿では、それはいわば意思決定のダイナミクスを明らかにすることでなければならぬと考える。

## II. マージナリティ仮説の系譜——逸脱と革新の経営学

### (1) 企業家活動と社会的文脈

シュンペーターの問題意識を継承し、企業者活動の供給を増大せしめるための社会的条件を考察する場合に、2つのアプローチがある。

1つは、特定社会における社会的・文化的諸要素を強調し、価値規範の体系や社会制度を独立変数とみなし、それらが、その社会の企業者活動の展開に対していかなる有利な、あるいは不利な影響を及ぼしているか、ということに焦点をあてる。これはいうまでもなく M. ウェーバーの宗教的エートスと経済活動の関連をめぐる命題を引継いだものであり、経済史では、A. コール、D. ランデスなどに代表される正統的な諸研究である<sup>26)</sup>。

2つ目は、企業家活動の担い手としての企業者が、いかなる社会的・文化的・職業的背景からより高い割合で輩出するか、それはどのような条件のもとであるのか、ということに焦点をあてる。この立場では、社会的・文化的諸要素が企業家の行動を規定し、制約するという側面を認めながらも、なおかつそのような制約を打破して革新を遂行する経済主体というも

---

26) 1949年同じハーバード大学のコール A.H. Cole (1889-1974) を中心に、経済史、社会学、経営学など諸分野の専門研究者による学際的研究組織として〈企業者史研究センター〉が設立され、〈企業者活動 entrepreneurship〉すなわち企業者、経営者の性能とその活動の社会的意味の解明に重点をおく〈企業者史 entrepreneurial history〉が、グラスらの狭義の〈経営史 business history〉とは異なった新しい経営学の流れとして発展した。1959年まで活動を続けた同センターの研究成果は機関誌《Explorations in Entrepreneurial History》に発表され、コール著《Business Enterprise in its Social Setting》(1959) はその集大成である。Landes, D. (1696, 2nd., 2003) (石坂・富岡訳 (1980)).

のにより多くの注意を向け、このような経済的革新者、すなわち企業者を生み出す社会的・文化的条件の解明を、その目的とする<sup>27)</sup>。

## (2) 意思決定のダイナミズム

経営戦略論において、非連続的革新を生み出す決定的瞬間の判断力のよ  
うなものが、日常的な経営管理をめぐる意思決定と、どのように異質な  
ものか、を考察したのが加護野忠男である。

周知のように組織認知を、組織の情報処理活動として早くから理論的に  
分析してきたのはコンティンジェンシー理論である。このアプローチにお  
いては、ある時期以降、組織における意味決定 (sense-making) や共有さ  
れる知識など、コンテクスト (context) に関する理論の重要性があらため  
て提起されている<sup>28)</sup>。例えば、経営組織論の加護野忠男は、組織における  
知識の利用と獲得の活動としての「組織認識」に着目し、組織の情報処理  
モデルにみられるような意思決定モデルの限界として以下の4点を指摘し  
ている<sup>29)</sup>。

- ① 組織の意思決定に焦点が合わされ選択に重点がおかれていたため  
に、知覚や理解などの認知過程が軽視されていた。
- ② 人間や組織を、それらが有する情報処理能力には制約があるという  
前提をおきながらも、あたかもコンピュータのような合理的存在とし  
てとらえていた。

27) Kirzner, I. M. (1973) (田島監訳 (1973)); カンティヨン, R. (1943) 戸田訳。

28) 典型は、Weick である。Weick, K. (1969) (遠田訳 (1997)); (1995) (遠  
田・西本訳 (2001))。また Mintsberg は、折衷理論を提唱している。  
Mintsberg, H. (1994) (崔他訳 (1997)); (2005) (池村訳 (2006))。

29) 加護野 (1988)。

- ③ 認知過程を、それをとりまく社会的コンテクストと分離してとらえていたために、組織の中で、共有されたものの見方、集団の不可視の圧力、集団や組織の規範などの認知過程への影響力を考慮していない。
- ④ 組織における状況認識や意思決定のパターン変化という動態的現象に十分に注意を払っていない。

以上の4点からみて、企業家活動においては、それが通常の戦略的意思決定と異なる点として「自己の立脚点を脱構築しつつけるプロセス」を組み込んだような分析、記述が必要となる、と考えることができる。環境認識における「ものの見方の変化」と「意思決定のパターン変化」が記述できるような方法論が必要なのである。

そのダイナミズムにおいては、具体的な「状況」のプラクティカルな改善を通じた行動からのフィードバックによって環境認識も意思決定のパターンも変化する。利益の出そうな業界を選ぶのも戦略だが、利益の出にくい業界で競争要因を主体的に変革することで儲かる仕組みを創造するのも戦略なのである。

### (3) 人間の2側面——受動性と主体性

経営者が直面している状況の具体的な意味は、平たくいえば（戦略の担い手としての）経営者は「意思決定」という定型化できる「決め方の論理」ばかりとはいえない。

経営プロセスにともなう一回性（ストーリー性、コンテクスト依存性）があるからこそ、そこには史的方法が試みられるのである。歴史に端的な不可逆性をもった時間展開のなかで、つまり、いつも「最初で最後」の状況が連続するプロセスにおいては、未来は「予測」するより「創る」（投企す

る)ものになる。不確実性のある現実のなかでまだ見ぬ可能性を構想しコミットすること、これが未来を生きる実践なのであり、つねに「未完のプロジェクト」なのである。そこでは、行為の動機が自らに発し行為の責任を自らで取るということ。効率性や利潤動機は、その手段価値にしかない。

その意味で、市場ニーズなるものが、あらかじめ与件として存在し、それに適応する事業を創造する、と考える構図ほど、企業家活動の本質から程遠いものはない。なぜならば、フロンティアを切り開き、創造する活動において、そもそも「ニーズ」自体などない。では、そこにあるものは何であろうか。また企業家活動における意思決定のパターンをみる際に、そもそも、それは何に対する自己決定なのであろうか。

そのような難題に対して包括的な提案をすることは現段階では難しいが、すくなくとも、何点か考慮しておくことが可能な点を指摘しておきたい。

その際に、いったん意思決定という概念をおき、行為論から考察できることを原理的に指摘しておきたい。誤解を恐れずにいえば、そこで何らかの決定をおこなうためには「(自己の)状況の限定が必要」ということである。その状況を限定する認識については、その内容の是非をあらためて正面から受け止め議論するのではなく、そのフィクションによって何がおこなわれているのかを観察するのである<sup>30)</sup>。

---

30) 経営戦略論において三品(2004)は、戦略の「内容」よりも、たとえどのような戦略であろうと、「戦略を持つこと」の機能に焦点を当てることで新境地を切り開いた。この点については、砂川(2005)。現場における臨床的な知については、経験的なあるいは「非定型」の「判断力」という議論も可能である。証拠と論理的な推論、双方を駆使した弁証、対話が必要である。特定の異なった視点に立ついくつかの話が提供され、それらが会話(対話)を通じて葛藤をはらみながらも実践的に調整されていくプロセスが、そこで

行為する存在としての人間を考えていくにあたって、人間を2つの側面をもったものとしてとらえておくのがよいだろう。それは受動的側面と能動的側面である。

受動的側面としては、人間は物理的、社会的にさまざまな制約を受けている。この制約されているという側面を受動的側面と呼ぶ。社会的側面というのは、その人がおかれている社会による制約（習慣、慣習、教育）と、その人の経験や体験である。日本語を母語としているというのは、そうした社会的な制約のひとつである。

つぎに能動的側面である。自由意思、欲望、欲求など、能動的に行為をおこなうという側面。選択能力や期待も含まれる。

両者の、2つの側面は互いに条件づけあう。ただ注意すべきは、受動的側面と能動的側面は、あくまでも一体となった人間を行為する存在という観点から分けたものであり、それぞれが独立に存在しているのではない。互いに相手を条件づけるものとしてある。意思は制約の中からしか生まれないし、欲望があるからこそ制約が制約として認識される。人間は受動的に主体性を担う（主体にならされる）存在である。

つぎに行為と期待について。

先ほどの分類に従っていうならば、人間は数々の制約を受けの中で意思をもち欲望をもって行為する存在である。しかし、意思だけでは行為はできない。世界は複雑であるため、未来に関して確実なことは何一つないことになる。もし自分の周りや未来に何が起こるのか、どうなるのか、まっ

---

は重視される。そのことで、事態の複雑さと全体性を浮かび上がらせる必要がある。この複雑さを、技術的知識のような単純系で近似できるととらえて対処してしまうと、特定の視点からの特定の処方で特定の変化を作り出し、その結果、事態をさらに改悪してしまうような罠におちいる可能性さえある。

たく分からない状況では、何をするにしても、さまざまな可能性をすべて考慮し、不確実性への対処なども考えて行為しなければならないことになる。このような状況では、人間は行為できるものではない。立ちすくむことなく、日々の営みをおこなえるのは、この圧倒的な不確実性を処理するわれわれのひとつの能力のおかげである。その能力が「期待」である。

確かに、原理的には、未来は不確定で何が起こるかかわからないし、実際、時として全く予想していなかった出来事が襲う。それでも、われわれは明日も今日と変わらないと思って振舞っている。この「明日も今日と同じだと思う」という思い、思い込み、これが期待である。ここでいう期待は、日常言語としての意味以上の含意をもつ。予期や予想、思い込み、見込み、想像、そうした「何かを～だと思う／そうあってほしいと思う」という人間の精神の働きを指す。つまり人間は、自分の経験や学習などで得たことをもとに、見込みを抱き、それにもとづいて行為する。

それが真実かどうか、あるいは確実な根拠を持つかどうか、そのようなこととは別に、自分が「こうであろうと思う」こと、それを足場にすることで、世界の複雑性の中で行為が可能となる。そこにおいては自分の見込みという一定の視点が得られることによって、世界についての理解を広げることができる（たとえ見込みとは違っていても、見込みとは違うということが知識として得られる）。

このように、われわれの日々の具体的な行為は、われわれの中にあるさまざまな期待によって支えられ、生み出されていると考えることができる。人間は期待する存在である。

以上の行為論的な議論をふまえたうえで、つぎにここで立ち返る参照点として想起さるべきは、A. マーシャル『経済学原理』における有名な「森」の比喩である。古典力学的世界観をもとにした経済学とは対照的に、

生物学との類比で中小企業への生態学的な視座を提示したととらえることが可能である。この視座は、現在の複雑系経済学や生命科学において発展的に継承されている。吉田民人によると、昨今のガン研究の大規模プロジェクトでは、メインになる複雑な現象は生物学者が担当し、非常にローカルな場面で、物理学や化学の現象として還元できる部分、つまり、単純系のモデル化で理解できる部分については物理学者や科学者に研究を分担させている。かつて生化学や生命物理の発達期における物理学と生物学との力関係が逆転しているのである。そのような流れに対応して科学的手法についても、2つの類型化が提案されている。物理学や単純系（現象を基本的に決めている要因を確定し理解できる関係性）に対応する「法則定立科学」と、生物学や複雑系（多くの要因が関与し、相互作用性のある関係性）に対応する「プログラム解明科学」である。前者は①法則とは、事象の推移について厳密な秩序として機能する②現象が生起する初期値さえ決まれば、あとの推移は決定される。③単純系（因果が線形に連続し、決定論的構造と予測が可能であるようなシステム）において有効、という特徴をもつ<sup>31)</sup>。

現実には、時間的展開のなかで不可逆に進行する予期のプロセス（相互作用の中で他者を参照しながら自分の行動を決定するメカニズム）を通して行為は選択されて連鎖していくために複雑系が生じる。当初のシナリオがそのまま有効であるような状況だけではなく、別のシナリオに切り替えたり、あるいは、相互交渉の過程のなかで当初のシナリオとは別のシナリオを開発することが必要となる。このような主体間の相互作用を含む複雑さの程度の極めて高い現象は、解析的に解明することが困難となってしまう（行動科学は目的＝手段しか考えず不自然な直情径行を想定する）。この状況においては、システムの小さな変動を増幅していくことでシステム全体を動かす

---

31) 吉田 (1999)。

正のフィードバックの不安定なプロセスが生じる。その変動とは、「原因」というよりも「契機」でしかない。しかしシステムの方向を決定づける。このような複雑系を生じる問題に対応して「プログラム解明科学」が提案されるのである。そこでは法則定立科学とは異なり、①個別の状況に即して複数のプログラムの選択が可能である。②現象の推移は、その状況に応じて選択される。③初期値が同じであっても、その結果は異なったものになりうる。

#### (4) マージナリティ仮説

つぎに人間の二側面と行為の相互作用のなかでのシステム性に対応した分析手法を確認した上で、マージナリティをめぐる議論の系譜を紹介する<sup>32)</sup>。先だつて言及したハーヴァード大学の企業者史研究センターでは、進められた研究のひとつとして、B. F. ホゼリッツをとりあげる。

ホゼリッツは、社会学における逸脱の理論 (the theory of deviance) の系譜のなかで「マージナル・マン」(marginal man) の理論を拡張し、逸脱者の理論として企業家をめぐる次のような仮説を提示した<sup>33)</sup>。彼は、マイノリティ・グループや異教徒、異端派からしばしば革新的企業家が出現したことに着目した。こうした社会的にマージナル (周辺的な) な位置にいる人々ほど、既存の秩序や既存の社会的価値に抵抗しがちであり、それが革新の源泉になるという「マージナル・マン」仮説である。

このような考えに対して、コールらは逆に社会に支配的な文化的価値が企業者活動に影響を与えると考える。企業者活動の源泉は何かという点に関心をもっていた彼らにとって、シュンペーターのようにそれが偶然的に

---

32) とくにホゼリッツについては邦語文献では、瀬岡 (1980) が検討している。

33) 瀬岡 (1980)。

起こると考えるのでは満足しない。社会の文化構造がその社会における企業者活動を活発にしたり、沈滞化させる、あるいは企業者活動の特性を規定すると考えたのである。こうした考えに導かれて、例えばランデス、はフランスにおいては企業の家族的性格があり、それゆえに行動を保守的、非革新的なものとした、とする。またフランス人に特有の個性的消費が大量生産体制の確立にとって阻止的要因となったこと、これらが相乗効果をもちフランス経済の停滞を招いたとする。これに対して、経済的個人主義や開拓者精神を尊重し、営利活動を肯定するプロテスタンティズムの倫理的影響が強いアメリカにおいては、ビジネスに適合的な経営風土があり、それが旺盛な企業者活動への強い促進効果をもったとする<sup>34)</sup>。

マージナルな存在としての企業家という概念については、より、その本質を深めるような議論を考えることも可能だと考えるので、その作業に入る前に、ライフ・ヒストリーをめぐる論点を整理しておきたい。

### Ⅲ. 企業者の「語り」を読み解く技法のために

#### (1) ライフ・ヒストリー研究の問題提起

ライフ・ヒストリーという技法のひとつの由来は、1920年代のシカゴ学派都市社会学におけるライフ・ヒストリーの方法論に求められる<sup>35)</sup>。1940年代後半以降、社会学の領域においては、統計調査を主とする量的研究や構造機能主義がより科学的な理論として主流の位置を占めるようになり、質的研究のひとつである生活誌をめぐるインタビュー法によるライフ・ヒストリーは批判を受け、周辺領域に位置するようになった。しかし、1950年代の終わりに、量的研究に対して質的研究に基礎をおく社会学者たちからの反発をきっかけとして、ヨーロッパを中心にライフ・ヒストリーとい

34) Landes, D. (1969) op cit.; Landes, D. (1949).

35) 中野・宝月編 (2003)。

う技法の復興の動きが生じた。その後のライフ・ヒストリーは、大きく分けて実証主義、解釈的客観主義、対話的構築主義の3つのアプローチ、調査者と被調査者の関係のとらえ方による立場の違いを内包し、複雑な形で発展することになった<sup>36)</sup>。

一方、ライフ・ヒストリー研究の技法としてのオーラル・ヒストリーは、政治史、労働史、地域史などのように、歴史研究の方法としてフィールドワークの伝統が根づいているところ、また学際的な交流がなされてきた研究領域で発展してきた。日本では特に政治史の領域において発展し、政治学においてはオーラル・ヒストリーとは「公人の、専門家による、万人のための口述記録」であると考えられていた<sup>37)</sup>。

元来、オーラル・ヒストリーの方法が編み出されてきた起源は、人類学や社会学の領域におけるライフ・ヒストリー（生活史）研究である。人類学では、20世紀初頭に異文化の少数民族を対象にライフ・ヒストリーの集積がおこなわれつづけてきた。また社会学においては、都市の貧困層や逸脱の問題関心をもとに、いわゆるシカゴ学派社会学が都市研究の一貫としてライフ・ヒストリーを用いたが、1940年代に北米の主流が実証主義的な統計調査法や、構造機能主義の方向性に向かい衰退した。しかし、その後、1970年代に入って主流の社会学への批判が起こる。すなわち社会（科学）の基本的な問題は、歴史性と社会過程の把握や社会的現実の理解にあるとしたうえで、個人が社会の担い手であると同時に社会の構成と解釈の主体でもある、という現象学的社会学や、A. ギデンズによる構造化理論的な考え方を強調する立場である<sup>38)</sup>。この世界的な流れのなかで、ライフ・

---

36) 江頭 (2007) 11-32頁; Thomas, W. I. and Znaniecki, F. (1918-1920) (桜井部分訳 (1983)).

37) 御厨 (2002)。

38) Giddens, A. (1984). ギデンズの構造化理論は認識論的な二元論に制約され

ヒストリー研究は、インテンシブなインタビュー調査と、C.ギアツ流に  
 いえば「分厚い記述」(thick description)に基づく研究方法として、復権の  
 兆しがみられた。その多くが、いわゆる民族誌 (ethnography) という形式  
 で記述されており、その対象も、学校や暴走族、工場、企業のオフィス、  
 実験室など多様である<sup>39)</sup>。またそれを受けて、経営学においても民族誌の  
 方法を有効視する研究も内外に蓄積されつつある<sup>40)</sup>。

オーラル・ヒストリーについて、第一に重要なことは、まずオーラル・  
 ヒストリーは歴史そのものではないということである。すなわち口述の語  
 りが過去の事実をそのままに表したものではないということである。しか  
 し、そうであるからそれが無価値なものであるわけではなく、人類学や社  
 会学においては、それが歴史の更新をせまる力をもつ点に注目してきたと

---

た西欧社会科学が陥りがちであった物象化と主意主義という2つの誤謬を克  
 服しようとした独自の社会理論である。それは、「社会構造は人間の行為主  
 体性によって作られていると同時に、それを作り出す媒体でもある」という  
 「構造の二重性」という観点から社会の存在を説明するものである。

39) Geertz, C. (1973) (吉田・中牧・柳川・板橋訳 (1987)); L. L. ラングネ  
 ス・G. フランク (1993) 米山共訳; 佐藤郁哉 (1984); (1999); 床呂編  
 (2015)。

40) 佐藤郁哉他 (2010); 金井 (1994)。現代科学への人類学アプローチの一つ  
 として科学人類学がある。Latour, B. (1987) (川崎・高田訳 (1999));  
 (1979)。科学人類学、科学技術社会論 (STS)、科学社会学においてアクター  
 ネットワーク理論 (ANT) と呼ばれるラトゥールやウールガーらのアプロ  
 ーチが生み出したその後の研究動向については以下を参照されたい。Law, J.  
 and J. Hansard (1999)。

また、例えば経営史学会編 (2014) は、日本経営史学会が若き学問として  
 産声をあげ、その後めざましく発展していった半世紀を、先駆者たる学究た  
 ちへのインタビューに基づいて構成した特筆すべきオーラル・ヒストリーの  
 成果である。そこにおいては、なかなか学説的研究の表側からは見えてこ  
 ない経営学、経済学、社会学等の分野にまたがる学際性や外国の学会との活  
 発な研究交流の姿が生き生きと語られている。

いえる。

また、このことと関連して、第二に、ライフ・ヒストリーの手法とは、観察者がインタビューという相互作用を通してインフォーマントとともに生み出した口述の語りという社会的な「実践」活動であるという点である。すなわち、資料の収集や分析、記述の仕方、公表の問題などに直面し、社会と社会学の関係のありかた、そのものが再考されながら対象と分析者の関係のありかたそのものも変化していくのである。このためにインタビュー自体の方法、過去の経験と「語り」の関係、「語り」がどのように編集されてライフ・ヒストリーを構成するのか、個人からいかに社会的なるものを取り出すのか、記述がいかに重要な位置を占めているのか、例えば、プライバシー保護の問題などに分析者は、直面することになる。つまりライフ・ヒストリーは、語り手、聞き手、読み手という三者の経験を媒介する表現方法なのである。

ライフ・ヒストリーは、個人のパースペクティブ、すなわち価値観、状況規定、社会過程の知識、体験をとおして獲得したルールなどにアクセスする方法であり、また、個人の反省 (self reflection) を社会的文脈と密接に関連づけながら記録する方法である。それは調査によって得られたオーラル・ヒストリーのみならず、自伝、伝記、日記、個人の公的記録 (新聞記事や教区資料など)、継続的にやり取りされた書簡などを資料としつつ記述される<sup>41)</sup>。

国内におけるライフ・ヒストリー復権の立役者である中野によれば、社会学にライフ・ヒストリーの方法を導入すべき前提となる問題認識には以下の3点がある。

---

41) 生活史の方法については、以下を参照。佐藤 (2008)、石川 (2014)。

- ① 人間を扱うにあたって、たいていは行為や態度の局面にばらした形であつかつて、個人として統合してとらえてこなかったこと
- ② 性別、年齢別、階層別、職業別といった集団化を急ぎ、そのような観点からの説明への早あがりのなかで、個性をもったままの諸個人をとらえそこなってきたこと
- ③ 調査対象者の生活の現場で、一対一で出会い、話し合うという機会や経験が失われてきたこと

である。この批判は、アンケート形式の質問調査票に向けられたものである。たしかに、アンケート調査の項目においてもそれまでの人生を社会的地位や居住地の履歴として記録するのであるから、100のアンケートは100のライフ・ヒストリーの記録といえなくもない。しかし、アンケート票は理論や先行研究から演繹的に質問項目が導き出され構築されているため、個々人の経歴の多様性や内面的な動きの個性は、一般に無視・捨象されてしまう。これに対して、ライフ・ヒストリーの方法は、あくまでも個性記述を志向しながら、人生の選択や心の動きの個性を解釈の対象にしていくところに特徴がある。

歴史社会学者であり、柳田國男の民俗学の方法を探究してきた佐藤健二は、ライフ・ヒストリーへの期待をもとに「もちろん、われわれもまた人間が関係的な存在であるというまなざしそれ自体を否定するというわけではない。批判されるべきは、関係的な存在という概念の実質を探求するより早く、その関係を『社会』とか『全体』とか、『規範＝秩序』などという、抽象的なことばに回収してしまう『社会学的な認識』である」と述べ、主体的で創造的に外界に働きかける行為者である個としての人間と、そうした個人を規定する関係的な秩序＝社会構造とのあいだに生ずる理論的な緊張関係こそを、きわめて重視すべきであることを指摘している<sup>42)</sup>。

また、同時に「ライフ・ヒストリーの試みが素朴に提起しているのは、  
 いうならば、個人はそうした関係が複雑に集積する〈場〉なのだという論  
 点である」と指摘し、個人と全体は、相互に規定するものであって、特定  
 社会のモノグラフが重要なのと同時に、特定個人のモノグラフ的研究を通  
 じて、縦走する関係性の相対としての全体（社会）を探求することが可能  
 であることを主張する。そして「じつは個人も複雑で重層的な存在」であ  
 り、いくなれば「フィールド」であると述べる。

この「フィールド」としての個人が、資料の集積であるという意味にお  
 いて、それを解釈しようという試みのなかで「ライフ・ヒストリー」とい  
 う課題が浮かび上がる。職場や学校などの公的領域だけでなく、私的な領  
 域、あるいは、両者から自立したいいわゆる「第三空間」<sup>43)</sup>が重層的に錯綜  
 するなかで個人の「ライフ」は具体的に状況規定されていることを対象化  
 するのである。いいかえれば個人をとりまく関係性を構成していることを  
 対象化するのである。

個性は、ある時点において期待された社会的役割からの逸脱の選択とし  
 て観察される。ライフ・ヒストリーは、まさしく人生のあるときにおけ  
 る、この、いわば「それらしくない振舞い」としての逸脱の選択の解釈に  
 おいて強みが発揮されることが社会学において議論されてきた<sup>44)</sup>。これは  
 経営学での文脈に置き換えれば、企業家的な意思決定の問題として考える  
 ことができる。

---

42) 中野編（1995）所収、19頁。

43) 都市社会学者の磯村英一は例えば盛り場のような家庭（第一空間）からも  
 職場（第二空間）からも区別された自立した秩序を持つ第三の空間の発生に  
 都市の本質をみた。磯村（1989）。

44) 山下（1977）；米倉（1999）；（1986）；（1998）。米倉（1998）は、企業家の  
 タイプとして「企業家的企業家」「技術志向的企業家」「市場志向的企業家」  
 「経営管理者的企業家」の4つを挙げている。

## (2) ライフ・ヒストリー研究とアイデンティティ

またライフ・ヒストリー研究が集中的におこなわれてきたのは都市社会学の領域である<sup>45)</sup>。「都市」というものは、異質性の高い、しかも大量の人口を抱え、さまざまな予期せぬ「出会い」を時に実現してしまうものであり、そこでの「出会い」がどのように状況定義を変容させ、それが本人に何をもたらしたか、それは時にアイデンティティの変更という決定的な局面に直面させもするのである<sup>46)</sup>。

コミュニケーションは、その送り手も受け手も、どちらの意思によっても完全にコントロールすることなど絶対にできない出来事である（コミュニケーションの外在性）。いうなれば、二人の「間で」起きてしまう出来事なのである。

人間のコミュニケーションとは、「どんなに誠意を持って接しても誤解されることはある」ものであるし、それが必然である。しかし、誤解や食い違いから人は他人と世界の「広さ」を学び体験することができるわけであるし、自分の殻を抜け出せるのだともいえる。また、先に述べたように、誤解や食い違いを生む距離こそが、各人の持っている異質性（偏り）を保っているものでもある。それは、何かが不完全だからなのではなく、人間のコミュニケーションの本性がそういうものなのである。

こうした意味で、コミュニケーションの体験とは、社会的なものの体験である。自分にとって切実なものとして巻き込まれざるをえないものでありながら、そこでは人間は思い通りにならない無力感やもどかしさを多かれ少なかれ味わうことになる。

どのような言葉や動作が繋がれていくのか、それは実際にコミュニケーションが起きてみるまでわからないということは、無限に多様なつながり

---

45) 中野・宝月編（2003）前掲書。

46) 砂川（2012）803-854頁。

が生まれる可能性が秘められているということである。それがコミュニケーション、特に言語によるコミュニケーションのもつ豊かさということだと考えることができる。このような、間で新しいものが生まれる（起きる）ことを、創発という。コミュニケーションとは、人々の間で創発しているものなのである。

そうした、多様な「都市の体験」を浮かび上がらせるうえで、この手法は有効であると考えられてきた。生活史研究は、都市における個性化のメカニズムの考察を深めてきたのである。

### (3) ライフ・ヒストリーと方法論的多元性

ライフ・ヒストリーは、「書かれたもの」「語られたもの」をデータとして用いるが、それゆえに解釈対照が言葉にされたものに切り詰められてしまう悪しき傾向もみうけられる。1人に人間の「書きえないこと」「かたりにえないこと」の広がり、厚みを、浮かび上がらせるような解釈枠組みや補助データを折衷主義的に組み合わせつつ、対象の個性を浮かび上がらせる工夫が必要である<sup>47)</sup>。

その際に、そのまま歴史的事実ではない口述のデータ（オーラル・ヒストリー）を取り扱ううえで、その特性について4点の指摘を佐藤の議論を、手がかりとして補足しつつ整理しておきたい<sup>48)</sup>。

#### ① 現在性

オーラル・ヒストリーは、歴史そのものではない。つねにそれは現在から照射された過去についての語りである。それは語られる現在に

---

47) この質的研究を進めるうえでの、方法論的折衷主義の有効性に関する議論としては以下を参照。Glaser, B. and L. Strauss (2000) (後藤訳)。

48) 佐藤 (2011)。

規定される。いかえれば「過去から見た現在」を照射する。

② 主体性

それは語り手が前提とする状況認識やバイアスを必然的にもつのみならず、そのインタビューにおける聞き手と話者との関係性に規定される。

③ 現場性

それは語り手の経験を生み出してきた生活空間に規定されているだけでなくインタビューのおこなわれている場によっても規定されたミクロな対面相互行為の経験に基づく。

④ 歴史性

現在性の問題とも連関するが、その語りは、その時代性、歴史性の産物とという。それ自体が解釈を必然的に読み手に要求するひとつの史料とという。

上記の4点を踏まえたうえで、ライフ・ヒストリーの技法について確認しておきたい。

まず調査データの特性について。いわゆるフィールドワーク調査においては聞き取り（インタビュー）調査法という手法がよく用いられる。調査対象者（インフォーマント）から、その人物の個人のことやその人物の所属している集団や組織についての情報を得ることになる。それは文献や史料にはない知識や情報を入手することを意味する。

ライフ・ヒストリー調査においても、相手（インフォーマント）に接近して相手の話を聞き、相手の視点に立って相手を理解しようとするのが基本となる。しかしライフ・ヒストリーの場合には、インフォーマント（被調査者）がそれまでに生きてきた人生について自由に口述し、それを聞き手（調査者）が時間をかけて聞き取り民族誌を記述することを意味する。

そこから法則性の定立が可能であれば、それに越したことはない。しかし必ずしも法則性の定立だけが目的ではないことは先述したとおりである。

経営学、経営史学ともに、社会科学的研究の多くが往々にして社会構造を優位におく視点が強調されがちである。しかしライフ・ヒストリー分析では、むしろ主体的行為者である個人の視点が重視される。ライフ・ヒストリーは、生活史あるいは個人史と呼ばれたりするが、現在を生きる人びとがまさに研究の対象になる。そこでライフ・ヒストリーとは、個人の生活の過去から現在にいたるまでの記録ということであるが、それは同時に、ある個人が調査者である聞き手との出会いのなかで自分の人生を語り、それをもとに調査者がその個人の人生を記述するという調査分析の方法といえる。その意味で、ライフ・ヒストリーは、個人の行動パターンを数量化、あるいは分類することもさることながら、その特徴は、社会的行為者（個人）の主観的見方を明らかにし、人間行動を理解しようとする調査方法にある。

聞き取り（インタビュー）は、出会いからはじまって、きわめてダイナミックな相互作用のプロセスといえる。つまり、聞き手を前にして語り手が自らのライフ・ヒストリーを語るのであるから、聞き手が変われば、その語りも大きく変化する可能性が存在する。聞き手によって同じ話がまったく違って語られることになる可能性が存在する。聞き取りの過程は、動的な相互作用の過程であり、そのあり方自体が有益なデータ収集の成果に直結することになる。

語りは相手によって変わり、語り手と聞き手の相互作用のあり方によって多様な語りが生まれる。ということは、語り手が述べる語りは、過去の出来事をそのまま単純に述べているということではありえない。それは過去をいま現在をとおして生きている主体が語り直しているということなのであり、ライフ・ヒストリーの技法とは、調査者が被調査者の語る内容を

その被調査者の解釈にそって編集し、被調査者の語る人生を文字として記述し、構成し直すことによって意味をなす。

#### IV. 課題と展望

企業家、あるいは経営者は、組織の内外の境界の媒介者であり、マージナルな状況での決断と説得を引き受ける。そこにおいては、自己の論理の前提をも問う作業を通じて決断することが状況の最先端でおこなわれていることである。そこでは相対主義的な管制高地にとどまることはできない。状況のただなかでの実践における方法が必要となる。それは具体的な状況に埋め込まれることを意味する。そこでは状況の推移に敏感な視点の移動と、その効果からみた巧拙だけが重要であり、この意味では立場の一貫性など、あまり意味をもつことはない以上、定型的意思決定のフレームワークに落とし込むような理解はあまり有効ではないことを確認してきた。

一方で、状況の外部に身をおいてみる能力をもつがゆえに状況の限界をみきわめることができ、その状況の展開にたいして非定型な判断が可能となる。限界的情况、すなわちマージナルな状況にあるアウトサイダーについても、自分のうちにさまざまなアウトサイダーの立場を受け入れ、それらのあいだの葛藤をうまく制御することが、そこでの重要なポイントとなる。

さまざまなマージナルな状況においてそれゆえの異端が続出し、それらが互いに覇を競う、それら葛藤しあう複数の異端を平衡させたり総合させたりするものこそ、「正統化」のはたらきである。それが機能するためには、それがさまざまな異端を理解できなければならない。そのことはすなわちすでに異端を包摂しているということである。葛藤しあう複数のストーリーの間に、ひとつのストーリーを与えることで正統は、機能するといえる。

このような構図のもと、企業家のライフ・ヒストリーという課題を、考える際に、「逸脱の選択」としての意思決定プロセスをダイナミクスとしてとらえるためには、以下の2点に留意しておく必要がある。

- (1) 「主体性」と「選択性」が見えなくするものに意識的であること。その設定そのものが、見かけ上のフィクションであり、実在のものと考えたと分析上の思考停止になること。
- (2) 企業家のアイデンティティから企業家の「アイデンティフィケーション」分析への動態的記述が必要になる。その際の分析視角としては、意思決定のパターンの変化、あるいは行為の理論による相互作用や、因果連関のメカニズムの分析が併せて必要であり、コミュニケーションとアイデンティフィケーションの過程を分析していく必要がある。

以上の課題において、オーラル・ヒストリーにもとづくライフ・ヒストリーの技法は、企業家活動の多様なあり方を対象としうるのみならず、例えば論者が取り組んできたような、中小企業家の労働過程＝生活過程をも、その分析対象としうるであろう<sup>49)</sup>。

また口述と文書資料、あるいは口述と社会統計的調査などとの二項対立的な区別によってオーラル・ヒストリーの方法を外側から定義しようという思考は不毛である。たしかにオーラル・ヒストリーは構成されたものであるとはいえ、明示的な分析や解釈によって再構成されたものでもない。その意味では、「資料と論文のあいだ」に存在するものである。最終生産物に結果として盛り込まれた分析や解釈、命題だけが価値をもつわけではない。そう考えると、それは中間的な素材にすぎないのではなく、ライ

---

49) 砂川 (1996) ; (1997) ; (2012) 前掲論文。

フ・ヒストリーの記述は、二次的な利用・分析に対しても開かれていく資料価値としての独自の評価をもつべきものである。

また、一般に、方法論議は、既存の概念のタコツボを破壊し、その前提を問うためにこそあるといえる。新領域を宣言し、そこに新しい分断の壁を作ることに熱中すべきではないのはいうまでもない。あくまでも、企業家研究という平坦とはいえない道りを歩んできた重要課題を継承、発展させていくことにおいて、個人というフィールドにおいて作用する社会の重層的な効果の発見こそが、ライフ・ヒストリーやオーラル・ヒストリーというアプローチが開く企業家研究の新しい扉なのである。いうまでもなく方法論は、すでに役立っている方法なしには成立しないし、方法の役立ち方や失敗の現われは、実践のなかにしか存在しない。つまり分析、記述の蓄積を先行させるべきなのである。

#### 参考文献

- 安部悦生（1995）「革新の概念と経営史」（由井常彦・橋本寿朗編『革新の経営史』所収）有斐閣。
- 石川良子（2014）「ライフストーリー研究に何ができるか：10年間の足跡を辿りながら」『日本オーラル・ヒストリー研究』10巻，19-28頁。
- 磯村英一（1989）「都市社会学研究」『磯村英一論集』Ⅱ，有斐閣。
- 江頭説子（2007）「社会学とオーラル・ヒストリー—ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリー—」『社会学とオーラル・ヒストリー—ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリー—』（特集 社会科学研究とオーラル・ヒストリー）『大原社会問題研究所雑誌』（585），11-32頁，法政大学大原社会問題研究所。
- 大河内暁男（1979）『経営構想力 企業家活動の史的研究』。
- 加護野忠男（1988）『組織認識論』千倉書房。
- 金井壽宏（1994）『企業家ネットワークの世界—MITとボストン近辺の企業家コミュニティの探求』白桃書房。
- カンティヨン，R.（1943）戸田正雄訳『商業論』日本評論社。
- 経営史学会（2014）『経営史学の歩みを聴く』文眞堂。
- コール，A. H.（1965）中川敬一郎訳『経営と社会』ダイヤモンド社。
- 佐藤郁哉（1984）『暴走族のエスノグラフィーモードの叛乱と文化の呪縛』新曜社。

- 佐藤郁哉 (1999) 『現代演劇のフィールドワーク芸術生産の文化社会学』 東京大学出版会。
- 佐藤郁哉他 (2010) 『組織エスノグラフィー』 (金井壽宏, ギデオン・クンダ, ジョン・ヴァン・マーネンとの共著) 有斐閣。
- 佐藤健二 (2008) 「歴史社会学におけるオーラリティの位置」『日本オーラル・ヒストリー研究』 4巻, 3-18頁。
- 佐藤健二 (2011) 『社会調査史のリテラシー方法を読む社会学的想像力』 新曜社。
- 砂川和範 (1996) 「中小機械工業のハイテク技術導入プロセスにみる熟練の変容」『経済社会学会年報』 19巻。
- 砂川和範 (1997) 「地域ネットワークカーとしての大田区発注側中小企業の役割」『東京大学経済学研究』 39巻。
- 砂川和範 (1999) 「ビデオ・ゲーム産業興隆の構図—もう一つの日本コンピュータ史—」『通史 日本の科学技術Ⅱ』 学陽書房。
- 砂川和範 (2001) 「状況的認知の視座からみた組織学習」『情報科学研究』 10, 62-83頁。
- 砂川和範 (2003) 「暗黙知の逆説」『商学論纂』 45巻 1・2号, 91-143頁。
- 砂川和範 (2005) 「書評 三品和広著『戦略不全の論理』」『組織科学』 38巻 4号。
- 砂川和範 (2006) 「衰退産業における企業家活動の可能性—逆境をバネとする成長戦略の論理」『日本大学経済学部産業経営研究所所報』 (58), 11-22頁。
- 砂川和範 (2012) 「ライフ・ヒストリー技法の実践からみた中小企業家の世界: 戦略をストーリーとして語ること」『商学論纂』 53巻 5・6号, 803-854頁。
- 瀬岡誠 (1980) 『企業者史学序説』 実教出版。
- 床呂郁哉編 (2015) 『人はなぜフィールドに行くのか—フィールドワークへの誘い』 東京外国語大学出版会。
- 鳥羽欽一郎 (1970) 『企業発展の史的研究』 ダイアモンド社。
- 中川敬一郎 (1963) 「産業革命期の企業者活動をめぐる経済史的・経営史的・企業者史的研究」社会経済史学会編『近代企業家の発生—資本主義経済成立過程の一面』。
- 中川敬一郎 (1981) 『比較経営史序説』 東京大学出版会。
- 中野卓他編 (1995) 『ライフヒストリーの社会学』 弘文堂。
- 中野正大・宝月誠編 (2003) 『シカゴ学派の社会学』 世界思想社。
- 沼上幹 (2000) 『行為の経営学—経営学における意図せざる結果の探究』 白桃書房。
- 三品和弘 (2004) 『戦略不全の論理』 東洋経済新報社。
- 御厨貴 (2002) 『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』 中央公論新社。
- 宮本又郎 (2004) 「企業家学の意義」『企業家研究 (第1号)』 企業家研究フォーラ

- ム、96-106頁。
- 山下幸夫（1968）「経営史学—その問題点と方法」(1)『中央評論』20(2)。
- 山下幸夫（1977）『経営史—欧米（経営会計全書）』日本評論社。
- 米川伸一（1973）『経営史学—生誕・現状・展望—』東洋経済新報社。
- 米倉誠一郎（1986）「企業家精神の発展過程」（小林規威ほか編『現代経営辞典』所収）、日本経済新聞社。
- 米倉誠一郎（1998）「企業家および企業家能力—研究動向と今後の方針—」『社会科学研究』第50巻第1号。
- 米倉誠一郎（1999）『経営革命の構造』。
- 吉田民人（1999）「21世紀の科学—大文字の第二次科学革命」『組織科学』（特集「プログラム科学—社会科学に〈法則〉はあるか」）32巻3号。
- ラングネス L. L.・フランク G.（1993）『ライフヒストリー研究入門 伝記への人類学的アプローチ』米山俊直共訳、ミネルヴァ書房。
- Baumol, W. J. (1968) "Entrepreneurship in Economic Theory", *The American Economic Review*, Vol. 58. No. 2, May.
- Braun, E. (2014a) "The Menger-Lachmann Trajectory on Capital: A Comment on Endres and Harper," *Journal of the History of Economic Thought* 36 (1) : 97-102.
- Braun, E. (2014b) "Menger on the Nature of Capital and its Structure: A Rejoinder," *Journal of the History of Economic Thought* 36 (1) : 111-13.
- Chandler, A. D., Jr. (1962) *Strategy and structure: Chapters in the history of the American industrial enterprise*. Cambridge, MA: The MIT Press. 『経営戦略と組織』（三菱経済研究所訳）実業之日本社、1967年。有賀裕子訳『組織は戦略に従う』ダイヤモンド社、2004年。鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳『経営者の時代（上）（下）』東洋経済新報社、1979年。
- Chandler, A. D., Jr. (1977) *The Visible Hand: the Managerial Revolution in American Business*, (Belknap Press, 1977). 鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳『経営者の時代—アメリカ産業における近代企業の成立（上）（下）』東洋経済新報社、1979年。
- Chandler, A. D., Jr. (1990) *Scale and Scope: the Dynamics of Industrial Capitalism*, (Harvard University Press, 1990). 安部悦生・川辺信雄・工藤章・西牟田祐二・日高千景・山口一臣訳『スケール・アンド・スコープ—経営力発展の国際比較』有斐閣、1993年。
- Dolan, G. (2010) "Essays on Capital and Interest," *Indiana: Liberty Fund*.
- Dolan, G. (2018) "The Essence of Entrepreneurship and the Nature and Significance of Market Process," *Indiana: Liberty Fund*.
- Elster, J. (1985) (ed.) *The Multiple Self*, Cambridge University Press.

- Geertz, C. (1973) *The Interpretation of Culture*, New York : Basic Books. 吉田禎吾・中牧弘允・柳川啓一・板橋作美訳『文化の解釈学〈1〉, 〈2〉』(岩波現代選書) 1987年。
- Giddens, A. (1984) *The Constitution of Society : Outline of the Theory of Structuration, Polity*. 門田健一訳『社会の構成』勁草書房, 2015年。
- Glaser, B. and L. Strauss (2000) *The Discovery of Grounded Theory, Aldine*. 後藤隆他訳『データ対話型理論の方法』新曜社。木下康仁訳『グラウンデッド・セオリアプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂, 2003年。
- Hutchins, E. (1990) 'The Technology of team navigation,' in J. Galegher, R.E. Kraut, and C. Egido (eds.), *Intellectual Teamwork : Social and Technological Foundations of Cooperative Work.*, Lawrence Erlbaum Avenue. 宮田善郎訳「チーム航行のテクノロジー」安西祐一郎他(編)『認知科学ハンドブック』共立出版, 1992年。
- Kirzner, I. M. (1966) *An Essay on Capital*, New York : Sentry Press.
- Kirzner, I. M. (1973) *Competition and Entrepreneurship*, Chicago. 田島義博監訳『競争と企業者精神』千倉書房, 1973年。
- Kirzner, I. M. (1976) "The Theory of Capital," In *The Foundation of Modern Austrian Economics*, ed. with an Introduction by E.G. Dolan. Kansas : Sheed and Ward.
- Knight, F. H. (1921) *Risk, Uncertainty and Profit*. 奥隅栄喜訳『危険・不確実性, および利潤』文雅堂書店, 1959年。
- Lachmann, L. M. (1986) *The Market as an Economic Process*. Oxford : Basil Blackwell.
- Landes, D. (1949) *French Entrepreneurship and Industrial Growth in the Nineteenth Century*, Bobbs-Merrill.
- Landes, D. (1969) *The Unbound Prometheus : Technological Change and Industrial Development in Western Europe from 1750 to the Present*, Cambridge University Press. 石坂昭雄・富岡庄一訳『西ヨーロッパ工業史—産業革命とその後 1750-1968 (1-2)』みすず書房, 1980年。
- Latour, B. (1979) *Laboratory Life : the Social Construction of Scientific Facts*, with Steve Woolgar, Sage.
- Latour, B. (1987) *Science In Action : How to Follow Scientists and Engineers Through Society*, Harvard University Press. 川崎勝・高田紀代志訳『科学がつくられているとき—人類学的考察』産業図書, 1999年。
- Lave, J. (1988) *Cognition in Practice : Mind, Mathematics and Culture in Everyday Life*, Cambridge University Press. 無藤隆他訳『日常生活の認知行動』新曜社,

- 1995年。
- Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press. 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』産業図書, 1993年。
- Law, J. and J. Hansard (1999) *Actor Network Theory and After* (Sociological Review Monographs).
- Leibenstein, H. (1968) "Entrepreneurship and Development", *The American Economic Review*, Vol. 58. No. 2, May.
- Marshall, A. (1890) *Principles of Economics*. 大塚金之助訳, 福田徳三補訂, 『経済学原理』佐藤出版部, 1919年。馬場啓之助訳『経済学原理』東洋経済新報社, 1965-1967年。
- Menger, C. (1871) *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*. 安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社, 1999年。
- Mills C. Wright (1959) *The Sociological Imagination*. Oxford University Press. 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店, 1995年。
- Mintzberg, H. (1994) *Rise and Fall of Strategic Planning*, Simon and Schuster. 崔大龍他訳『戦略計画 創造的破壊の時代』産能大出版部, 1997年。
- Mintzberg, H. (2005) *Managers Not MBAs: A Hard Look at the Soft Practice of Managing and Management Development*. 池村千秋訳『MBA が会社を減ぼす マネジャーの正しい育て方』日経BP, 2006年。
- Mintzberg, H. et als. (2008) *Starategy Safari*, FT Press. ヘンリーミンツバーグほか著, 齋藤嘉則訳『戦略サファリ第2版—戦略マネジメント・コンプリート・ガイドブック』東洋経済新報社, 2012年。
- Suchman, L. A. (1987) *Plans and Situated Actions*, Cambridge University Press. 佐伯胖監訳『プランと状況的行為』産業図書, 1999年。
- Shumpeter, J. (1926) *Theorie der wirtschaftlichen*. 塩野谷祐一他訳『経済発展の理論』。J. A. シュンペーター著, 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』上・下巻, 岩波書店, 1977年。
- Thomas, W. I. and Znaniecki, F. (1918-1920) *The Polish Peasant in Europe and America*, Reprinted, Dover. 桜井厚部分訳『生活史の社会学』御茶の水書房, 1983年。
- Wenger, E. (1998) *Communities of Practice*, Cambridge University Press.
- Weick, K. (1969) *The Social Psychology of Organizing*. 遠田雄志訳『組織化の社会心理学』文眞堂, 1997年。
- Weick, K. (1995) *Sensemaking in Organizations*. 遠田雄志・西本直人訳『センスメ

ーキングインオーガニゼーションズ』文真堂, 2001年。

Weick, K. (2001) *Making Sense of the Organization*.